

実技系科目のシラバスに関する研究 — 楽譜を読む能力の開発 —

伊達華子

地域教育文化学部 文化創造学科
植木由利子・中畑 淳・古賀 望子
地域教育文化学部 文化創造学科 非常勤講師
(平成21年10月1日受理)

要 旨

今、盛んにシラバスの充実が叫ばれているが、授業形態から実技系のシラバスは、多くの学生を対象とした授業計画とは自ずと違うものである。実技系科目のシラバスのあり方を考えると、学生の進捗度は問わずに学期の間に身につけるべき点を明らかにし、次に理解度や習得度の確認を行っていくことを授業計画に示すことが望ましい。しかし、技術の問題や読譜力・表現力の問題いずれをとっても、数回の授業の中で完結するものではなく、全ては同時進行かつ連続性のあるべきものであり、従って、その到達度設定もきわめて不明瞭である。

本論は、この様な問題点を考慮し、より良い授業計画をたて、それを実践していくためにピアノ実技教員4名が集まり、議論し、読譜能力開発に重点を置いた来年度22年入学生に示す新たなシラバスを策定した。

今、大学ではシラバス作成ガイドラインが示され、シラバスを作成するに当たってその内容を充実させ、より望ましいシラバスとするよう求められている。

大学教育改革のなか、機関としての教育の目標の明確化と、学生に対する目標の明示が、大学教育の質的向上への方策と位置づけられたためである。

ガイドラインによれば、シラバスを作る目的・意義として

- ① 科目を学ぶ意義の明確化
- ② 学生との契約・履修条件・成績評価・教科書・参考書などの明示化
- ③ 教員が授業計画を開講前に作成することで、科目の内容の体系化が図られ、成績評価基準を具体的に書くことで、学習到達目標をより明確に認識
- ④ 授業の概略・計画を知ること、学生の授業前の準備が可能
の4点が一般的に挙げられている。

本来、講義計画(シラバス)において、どのように教員が知見を練り上げ、どのように講義するかはそれぞれの教員の知見に任されていた。しかし今、ガイドライン等によって形式の統一化、ひいては内容の統一化が進み、本来、講義の独自性を表現するためのものであるべきシラバスが変わってきているように思える。

実技系科目においても、授業形態や学生個々人の進捗度の違い等の理由から、画一的な授業計画は馴染まないものであり、むしろ学生個々人の授業計画が必要でさえある。

実技系科目のシラバスのあり方を考えると、学生の進捗度は問わずに学期の間に身につけるべき点を明らかにし、次に理解度や習得度の確認を行っていくことを授業計画に示すことが望ましい。しかし、技術の問題や読譜力・表現力の問題いずれをとっても、数回の授業の中で完結するものではなく、全ては同時進行かつ連続性のあるべきものであり、従って、その到達度設定もきわめて不明瞭である。

本論は、このような問題点を考慮し、より良い授業計画をたて、それを実践していくために、ピアノ実技教員4名が集まり、議論し、来年度22年入学生に示すシラバスの策定を目的としたものである。

1-1 育成の目標

シラバス作成にあたって、各教員が掲げる『育成の目標』を以下にあげる。

伊 達

I 正確な読譜力の構築

- (1) 適切なテンポが取れる。テンポのコントロール。曲中のテンポの変化を含め、曲全体のテンポの一貫性
- (2) 良いリズム。呼吸、息の意識
- (3) フレージングを意識し、一つのフレーズが何処までなのかを理解する。ハーモニーの理解も必須
- (4) ペダルの目的の理解。空間の響きを聴く

II 作品の意味内容を把握し、イメージ・創造力の開発

- (1) 曲全体のプランが持てる。作品の特徴、様式など全体の構造を捉えること
- (2) 想像力、イメージを持ち、単に安全運転のような気力のない演奏を行わない
- (3) タッチはキーをしっかりと捕まえ鍵盤との密着性を身につける。ポリフォニックに手を使う

植 木

I 正確な読譜力と分析・解釈力を養う

- (1) ソルフェージュ能力と楽典の理解
 - ・調性の把握と和声の理解
 - ・明確なテンポ・拍節感・リズム感
 - ・さまざまな記号と音楽用語の理解
- (2) 時代様式と楽曲形式についての理解
- (3) (1)、(2)により作曲家の意図を理解しようとする姿勢

II 演奏能力を高める

- (1) 正しい姿勢と適切な運指
- (2) 適切なテンポ設定とその一貫性
- (3) 多種多様な音質・音色に見合った打鍵と脱力

- (4) 目的にかなったペダリング
- (5) 技術的困難を克服するための練習法

Ⅲ 表現力を深める

- (1) 安定したテンポと自然かつ豊かなルバート
- (2) 豊かな音色とフレーズ感
- (3) 音の響きとバランス、音色に対する豊かな感性
- (4) 自身の音や演奏を客観的に聴く“耳”の訓練
- (5) 時代様式と楽曲形式の理解に基づく構成力と説得力

中 畑

I 楽譜を読む力をつける

- (1) 正確な読譜（楽典の理解・注意力）
- (2) 演奏習慣の研究と考察
- (3) 記譜習慣の研究と考察

II 音楽作品を適確に理解する力を育てる

- (1) 時代様式の研究
- (2) 作曲家と作品の研究
- (3) 審美眼の育成

III 音楽表現の技法を発展させる

- (1) 楽曲の内容を理解する
- (2) 演奏表現のイメージをとらえる
- (3) 演奏表現に必要な具体的な技術・技巧の探究、修得、完成

IV 演奏技術の向上をめざす

- (1) ポリフォニー
- (2) タッチ、音色の研究
- (3) 音楽的聴覚の育成
- (4) ペダル奏法の研究

古 賀

I ピアノ演奏技術の向上

- (1) 個々のテクニック上の問題点を踏まえ、打鍵・脱力などを見直す
- (2) 「古典派のソナタ」の課題を通し、指使い・打鍵・ペダリングを工夫し、演奏技術の向上を図るとともに、古典派の作品に相応しい音色を作り出すことを目指す
- (3) 「バロック」(多声音楽)の課題を通し、バランス、音色の変化に見合った打鍵や指使いで、各声部を立体的に弾き分ける事が出来るようにする

II 正確な読譜力の育成

- (1) 課題曲以外に、簡単な楽曲を用いた「初見視奏」のトレーニングを取り入れ、楽譜に書かれたことを即座に読みとる力を養う
- (2) 「古典派のソナタ」「バロック」の課題を通し、適切なテンポ・拍節感・リズム・フレーズなどを楽譜から読みとり表現出来る力を育てる

Ⅲ 和声感・調性感の育成

- (1) 「古典派のソナタ」や「スケール全調（カデンツ）」の学習を通し、ハーモニーの理解を深め、それを土台に常にフレーズを意識した演奏を目指す
- (2) 和声・調性の理解を、作品の構造、音楽全体の構成を捉えることに結びつけていく。

Ⅳ 想像力・表現力の育成

- (1) 音楽を作り上げていく上で、自分はどのように表現し、どんな音色を求めているかなど、作品や音に対するイメージを持って練習に取り組めるようにする
- (2) 作品の時代様式・楽曲形式などの研究を通し、期末試験の演奏曲の「楽曲解説」をまとめ、作品の理解をより深める

Ⅴ 音楽の指導力・鑑賞力の育成

- (1) 音楽を聴く力、指導する力の育成として、試験前に「弾き合い会」を設定する。互いの演奏を聴き、批評する機会を設け、ⅠⅡⅢⅣを踏まえて作品の解釈や演奏を適切に評価出来るような表現力を育成する
- (2) 毎回の授業でも、他の学生のレッスンを聴講し、個々の個性や問題点を見出し、自身の学習に活かすようにする

以上、4名の育成目標を挙げたが、ここから各教員が学生に対してどのような指導指針を持っているかを検証し、シラバス上に明確に指し示すべき包括的な『育成の目標』を探っていきたい。

全体を見渡すと、それぞれの育成理念および最終的な到達目標が非常に近いことがわかる。しかし同時に、到達目標が同じであってもそこに至るまでの“道筋”が微妙に違うことも見えてくる。この差異によって各教員および各学生それぞれに微妙な“ずれ”が生じる可能性があり、いま一度、共通理解を確認する必要があると考える。

まず、それぞれの育成目標において重要なキーワードとなるのが「読譜力」である。古賀は第二の項目としてこれを掲げ、伊達、植木、中畑はそれぞれ第一の項目に掲げている。特徴的なのは、伊達が「ペダルの研究」を、植木が「様式と形式の理解」を「読譜力」として要求している点である。さらに、中畑は「記譜習慣」を、古賀は「初見視奏」のトレーニングの必要性をそれぞれ挙げている。これらのことから、各教員にとって「読譜力の育成」が指導指針として重要な意味を持つものであることがわかる。

ここで、具体例を示し、われわれが考える「読譜」の概念について考えてみる。

*モーツァルト：ソナタKV.331 第1楽章 冒頭8小節

(譜例)

The image shows a musical score for the first 8 measures of the first movement of Mozart's Sonata KV.331. The score is in G major (one sharp) and 3/4 time. The tempo and mood are marked 'Andante grazioso'. The score is presented in two systems, labeled 'II.' and 'III.'. The first system shows the piano part with a treble and bass clef. The second system shows the piano part with a treble and bass clef. The score includes dynamic markings such as 'p' and 'sfz'.

誰でも知っている楽曲であるから、学生はまず問題なく楽譜に書かれている“音符”を鍵盤上に正しく置き換えることができる。そして、それで正しい「読譜」ができたという誤った認識が生まれることが危惧される。しかし、それだけでは音楽作品を演奏したことにはならない。このわずか8小節の中でも、音楽表現として実に多くの事が要求される。

まず、“Andante grazioso”という指示、“イ長調”という調性、“8分の6拍子”という拍子から、この楽曲が“どのような性格”であり、“どのような拍節感”を持ち、“どのようなテンポ”で演奏されるのが適当であるかを判断しなければならない。右手に示されるスラーに従ってその旋律を豊かに歌わせ、4小節目の半終止と8小節目の完全終止を見つけ、フレーズのまとまりと自然な抑揚も表現できることが望ましい。また、最初の3小節目間の左手と、それに続く右手がポリフォニーであることにも注意を喚起したい。7小節目の最後に示されるsfの記号から、その和音の響きに対する注意力も必要である。さらに、古典派の作品であることを考慮してのテンポの一貫性や適切なペダリングも要求される。特に1年次において、適切なテンポの設定、調性の把握による音色感、和声の理解に基づくフレーズの意識をぜひ身につけて欲しいものである。

このように、“楽譜を深く読む力”とは“楽曲を正しく理解し解釈する力”であり、音楽を表現する上での礎であることは明らかである。このことが、われわれが第一の項目に「読譜力」を掲げる理由である。

次に指摘しているのが「イメージ・表現力」である。伊達は、この項目に“タッチ”と“ポリフォニー”を含めているが、中畑、植木、古賀はそれを「演奏技術の向上」の問題として扱っている。また、植木は“音色”の問題を「表現力」と「演奏技術」の二つの項目の中で、中畑も“技術・技巧の習得”を「表現力」の項目の中でそれぞれ要求している。しかし、表現と技術の問題は言ってみれば表裏一体であり、切り離して論じることには無理がある。例えば、前述の“grazioso”という指示から、優雅で柔らかい音で演奏したいと考え、そのためにはどのようなタッチが望ましいかという技術の問題がここに発生する。さらに、よりレガートで美しく“歌わせる”ためのペダルの研究、あるいはポリフォニーを片手で美しく奏するための各指の独立と運指（指づかい）の問題も不可欠である。つまり、「表現」を追求することと、そのために必要な「技術」を習得することは、同時に行われるものと考えべきである。特に1年次において、求められる音色とそれに見合った打鍵、ポリフォニーを奏するにあたっての各指の独立と適切な運指法をぜひ習得して欲しいものである。

深い「読譜」によって作品を正しく「理解・解釈」し、それをどのように「表現・創造」していくかを熟慮し、そのために必要な「演奏技術」をいかに習得するか、という問題を探求していくことが音楽作品を演奏するうえでの重要な指針となる。1年次において、この点を十分に認識し、それを実践することを要求したい。

以上の検証を踏まえ、『育成の目標』として次の三点を掲げ、シラバスの策定にあたることとする。

- I 読譜力・解釈力の育成
- II 表現力・創造力の発展
- III 演奏技術の向上

1-2 シラバスの検討

前項では各自の「育成の目標」を検討し、3本の柱をたてた。その「育成の目標」に従い、次に現行のシラバス、植木、中畑、古賀のシラバス試案を検討し、より良いシラバスの改定に繋げたい。

それらのシラバスを以下に検証してみる。

山形大学シラバス 2009年度 現行

<p>ピアノ I A Piano I A 担当教員: 伊達 華子 (DATE Hanako) 中畑 淳 (NAKAHATA Makoto) 担当教員の所属: 地域教育文化学部文化創造学科, 地域教育文化学部非常勤講師 開講学年: 1年 開講学期: 前期 単位数: 2単位 開講形態: 演習</p>
<p>【授業概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ ピアノ奏法の基本を認識・確認し、正確な奏法、読譜の確立をめざす。 ・ねらい ピアノ奏法に当たって必要欠くべからざる音楽の基礎能力 — 調性感覚、リズム感覚、拍節感、フレーズ感、音色、音価に対する感覚 — 、ピアノ奏法の基礎 — 運指法、ペダル奏法、レガート奏法 (タッチ) — などを確立し、作品の解釈および演奏様式を学ぶ。Aでは、古典派のソナタを題材として前記の基礎能力の発育、実践を行う。 Bではバッハ平均律集を中心に、多声音楽を学ぶ。 ・目標 古典派のソナタを教材として、正確な読譜力と音楽的洞察力、解釈力を身につける。 ・キーワード 意志のある演奏 <p>【授業計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の方法 各人 30分程度の個人指導 ・日程 各人の進捗度によって異なるが、前期は古典のソナタを中心に授業を進め、以下のことを学ぶ。 <ol style="list-style-type: none"> 1. 正確な読譜力 2. 楽曲にふさわしい音づくり (表現力) 3. ペダリング 4. 声部の独立性 5. 多声音楽の様式と把握 6. 個々人に適した楽曲も並行に取り上げ、楽曲の解釈・演奏能力の拡大を図る 期末試験の課題曲は、ハイドン・モーツァルト・クレメンティのソナタより任意の一曲 (以下省略)

<p>ピアノ I B Piano I B 担当教員：伊達 華子(DATE Hanako)中畑 淳(NAKAHATA Makoto) 担当教員の所属：地域教育文化学部文化創造学科音楽芸術コース 開講学年：1年 開講学期：後期 単位数：2単位 開講形態：演習</p>
<p>【授業概要】</p> <ul style="list-style-type: none">・テーマ ピアノ奏法の基本を認識・確認し、正確な奏法、読譜の確立をめざす。・ねらい ピアノ奏法に当たって必要欠くべからざる音楽の基礎能力 — 調性感覚、リズム感覚、拍節感、フレーズ感、音色、音価に対する感覚 — 、ピアノ奏法の基礎 — 運指法、ペダル奏法、レガート奏法(タッチ) — などを確立し、作品の解釈および演奏様式を学ぶ。 Aでは、古典派のソナタを題材として前記の基礎能力の発育、実践を行う。 Bではバッハ平均律集を中心に、多声音楽を学ぶ。・目標 バロック、特にバッハ《平均律クラヴィーア曲集》を教材として、正確な読譜力と音楽的洞察力、解釈力を身につける。・キーワード 意志のある演奏 <p>【授業計画】</p> <ul style="list-style-type: none">・授業の方法 各人 30分程度の個人指導・日程 各人の進捗度によって異なるが、後期はバッハ《平均律クラヴィーア曲集》を中心に授業を進め、以下のことを学ぶ。<ol style="list-style-type: none">1. 正確な読譜力2. 楽曲にふさわしい音づくり(表現力)3. ペダリング4. 声部の独立性5. 多声音楽の様式と把握6. 個々人に適した楽曲も並行に取り上げ、楽曲の解釈・演奏能力の拡大を図る期末試験の課題曲は、バッハ平均律より任意の一曲 (以下省略)

このシラバスは、2009年度(現行)のものであり、基本的に前年度までの内容・方向性を踏襲している。

15回にわたる授業計画の内容は個別に示されていないが、『各人の進捗度によって』『1 正確な読譜力』『2 楽曲にふさわしい音づくり(表現力)』『3 ペダリング』『4 声部の独立性』『5 多声音楽の様式と把握』『6 個々人に適した楽曲も並行に取り上げ、楽曲の解釈・演奏能力の拡大』の育成を図る特徴をもっていることがわかる。伊達は「育成の目標」として「I 正確な読譜力の構築」「II 作品の意味内容を把握し、イメージ・創造力の開発」をあげており、これらが反映されていると思われる。

シラバス案 植木「ピアノⅠA」

ピアノⅠA			
開講学年:	1年	開講学期:	前期
単位数:	2単位	開講形態:	演習
【授業概要とねらい】			
<p>古典派のソナタの研究を通して以下の点について学び、より深く楽曲を理解し豊かな演奏表現を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・正確な読譜力と分析・解釈力を養う。 ・調性感、和声感、拍節感、フレーズ感を身につける。 ・正しい姿勢、運指を身につける。 ・音質に見合った打鍵と脱力、ペダリングを習得する。 ・古典派の作品における様式感および楽曲の形式についての理解を深める。 			
【授業計画】			
・授業の方法			
各人 30分程度の個人指導。			
・日程			
第1回 オリエンテーション			
<ul style="list-style-type: none"> ・前期授業の概要ならびに目標についての確認。 ・各人の既習曲をふまえて、課題と授業計画を決定。 			
第2回 実技演習① 読譜			
第3回 実技演習② 読譜			
第4回 実技演習③ 分析・解釈			
第5回 実技演習④ 分析・解釈			
第6回 実技演習⑤ 技術の習得			
第7回 実技演習⑥ 技術の習得			
第8回 実技演習⑦ および初見視奏の実践			
第9回 実技演習⑧ 様式・形式の理解			
第10回 実技演習⑨ 様式・形式の理解			
第11回 実技演習⑩ 構成力・表現力			
第12回 実技演習⑪ 構成力・表現力			
第13回 実技演習⑫ 確実な暗譜			
第14回 実技演習⑬ 確実な暗譜・確認(リハーサル形式)			
第15回 実技試験(暗譜による学内公開演奏)			
(以下省略)			

シラバス案 植木「ピアノ I B」

ピアノ I B
開講学年:1年 開講学期:後期 単位数:2単位 開講形態:演習
【授業概要とねらい】 バッハ:「平均律クラヴィーア曲集」の研究を通して以下の点について学び、より深く楽曲を理解し豊かな演奏表現を目指す。 <ul style="list-style-type: none">・正確な読譜力と分析・解釈力を養う。・調性感、和声感、拍節感を身につける。・音質・音色に見合った打鍵を習得する。・各声部の独立と声部間のバランス感を身につける。・バロックにおける様式および楽曲の形式についての理解を深める。
【授業計画】 <ul style="list-style-type: none">・授業の方法 各人 30分程度の個人指導。・日程 第1回 オリエンテーション ・後期授業の概要ならびに目標についての確認。 ・各人の既習曲をふまえて、課題と授業計画を決定。第2回 実技演習① 読譜第3回 実技演習② 読譜第4回 実技演習③ 分析・解釈第5回 実技演習④ 分析・解釈第6回 実技演習⑤ 技術の習得第7回 実技演習⑥ 技術の習得第8回 実技演習⑦ および初見視奏の実践第9回 実技演習⑧ 様式・形式の理解第10回 実技演習⑨ 様式・形式の理解第11回 実技演習⑩ 構成力・表現力第12回 実技演習⑪ 構成力・表現力第13回 実技演習⑫ 確実な暗譜第14回 実技演習⑬ 確実な暗譜・確認(リハーサル形式)第15回 実技試験(暗譜による学内公開演奏) (以下省略)

これらのシラバスは、「Ⅰ. 正確な読譜力と分析・解釈力を養う」「Ⅱ. 演奏能力を高める」「Ⅲ. 表現力を高める」という育成の目標に基づいて作成されている。

この目標を達成するために、13回にわたる実技演習では、「読譜(2回)」「分析・解釈(2回)」「技術の習得(2回)」「様式・形式の理解(2回)」「構成力・表現力(2回)」「確実な暗譜(2回)」のように、各回における重点が具体的に提示されていることと、「初見視奏の実践」が導入されており、特徴となっている。

シラバス案 古賀「ピアノⅠA」

ピアノⅠA	
開講学年:1年	開講学期:前期 単位数:2単位 開講形態:演習
【授業概要とねらい】	
<ul style="list-style-type: none"> ・「古典派のソナタ」の演奏・研究を通し、正確な読譜力と様式感を捉えた豊かな表現力の習得を目指す。 ・特に和声感・調性感・拍節感・フレーズ感の感じられる表現に重点を置き、演奏表現の発展を目指す。 ・指使い・打鍵・脱力・ペダリング等を工夫し、ピアノ奏法の基礎技術の向上を図るとともに、古典派の作品に相応しい音色を作り出すことを目指す。 ・「ハノン1番～10番」を練習に取り入れ、演奏技術の基礎を確立する。 ・これらの成果を暗譜による実技試験で発表する。 	
【授業計画】	
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の方法 <ul style="list-style-type: none"> 1コマ3名で受講 一人当たり 30 分程度の個人指導になるが、他の学生のレッスンを聴講し、自身の学習に活かすようにする。 ・日程 <ul style="list-style-type: none"> 第 1 回 ガイダンス 前期試験課題曲及び、個々の既習曲をふまえて、個人の技能にあった課題を話し合って決める 第 2 回 実技演習 第 2 回から第 14 回までは、個々の進度に合わせて、個人レッスン、または、グループレッスンを行う 前期(ⅠA)では、古典派のソナタを中心に、作品の構成、表現方法について考え、演奏技術や解釈に関わる諸問題を総合的に扱う。また、ピアノ奏法の基礎作りとして、ハノン(#1～#10)のチェックを併せて行う 第 3 回 実技演習 第 4 回 実技演習 第 5 回 実技演習及びハノンチェックテスト① 第 6 回 実技演習 第 7 回 実技演習 第 8 回 実技演習及びハノンチェックテスト② 第 9 回 実技演習 第 10 回 弾き合い会①及び実技演習 前期に2回程度、試験曲の弾き合い会を開き、学生間で互いの演奏を聴き批評することで、お互いが向上できるようにする 第 11 回 実技演習 第 12 回 実技演習 第 13 回 実技演習 第 14 回 弾き合い会②及び実技演習 第 15 回 実技試験実施(学内公開) 	
(以下省略)	

シラバス案 古賀「ピアノ I B」

ピアノ IB	
開講学年: 1 年	開講学期: 後期 単位数: 2 単位 開講形態: 演習
【授業概要とねらい】	
<ul style="list-style-type: none"> ・「バッハ: 平均律クラヴィーア曲集」の演奏・研究を通し、正確な読譜力と様式感を捉えた豊かな表現力の習得を目指す。 ・特に1Aで習得した奏法の基礎をベースに、和声感・調性感・フレーズ感を磨くことに重点を置き、演奏表現の発展を目指す。 ・バロックの様式を理解し、ポリフォニー(多声音楽)の音色・声部間のバランスを工夫することにより、各声部を立体的に弾き分けることが出来るようにする。 ・「初見視奏」「スケール全調」の学習を取り入れ、読譜力と調性感を養う。 ・これらの成果を暗譜による実技試験で発表する。 	
【授業計画】	
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の方法 <ul style="list-style-type: none"> 1コマ3名で受講 一人当たり 30 分程度の個人指導になるが、他の学生のレッスンを聴講し、自身の学習に活かすようにする。 ・日程 <ul style="list-style-type: none"> 第 1 回 ガイダンス <ul style="list-style-type: none"> 後期試験課題曲及び、個々の既習曲をふまえて、個人の技能にあった課題を話し合って決める 第 2 回 実技演習 <ul style="list-style-type: none"> 第 2 回から第 14 回までは、個々の進度に合わせて、個人レッスン、または、グループレッスンを行う。 後期 (IB) では、バッハの平均律クラヴィーア曲集を中心に、バロック (ポリフォニー) の基本的な様式を学び、テクニック、表現方法について考え、演奏技術や解釈に関わる諸問題を総合的に扱う。また、正確な読譜力の確立、演奏技術や調性感の養成をめざし、初見視奏のトレーニングおよびスケール全調のチェックも併せて行う 第 3 回 実技演習 第 4 回 実技演習 第 5 回 実技演習及び初見演奏の実践練習① 第 6 回 実技演習 第 7 回 実技演習 第 8 回 実技演習及び初見演奏の実践練習② 第 9 回 実技演習 第 10 回 弾き合い会①及び実技演習 <ul style="list-style-type: none"> 後期に2回程度、試験曲の弾き合い会を開き、学生間で互いの演奏を聴き、批評することで、お互いが向上できるようにする 第 11 回 実技演習 第 12 回 実技演習 第 13 回 実技演習 第 14 回 弾き合い会②及び実技演習 第 15 回 実技試験実施(学内公開) 	
(以下省略)	

これらのシラバスは「I. ピアノ演奏技術の向上」「II. 正確な読譜力の育成」「III. 和声感・調性感の理解」「IV. 想像力・表現力の育成」「V. 音楽の指導力・鑑賞力の育成」

という育成の目標に基づいて作成されている。

13回にわたる実技演習における指導内容の重点は具体的に示されていないが、中でも、「Ⅱ. 正確な読譜力の育成」の展開として、「初見視奏のトレーニング」を導入している点、「Ⅳ. 想像力・表現力の育成」の展開として、「楽曲解説を（文章として）まとめて提出させる」点が、特徴となっている。

シラバス案 中畑「ピアノⅠA」

<p>ピアノⅠA</p> <p>担当教員：</p> <p>担当教員の所属：</p> <p>開講学年：1年 開講学期：前期 単位数：2単位 開講形態：演習</p>
<p>【概要とねらい】</p> <p>ピアノ演奏における基本的な演奏技術、表現手法を研究して、ピアノによる演奏表現の発展を目指す。とりわけ、基礎技術の向上（ハノン 1番～10番）と古典派のソナタに重点をおく。これらの成果は、暗譜による実技試験（発表会形式）を行って確認する。</p> <p>古典派の音楽作品における様式感をとらえて適確な作品解釈をおこなうとともに、必要となる演奏技術ならびに表現技法について研究する。</p> <p>【授業計画】</p> <p>第1回 オリエンテーション 前期の学習目標ならびに課題内容を確認する。各学生の進捗にもとづいた学習計画を検討・決定する。</p> <p>第2回 ピアノ実技演習① 古典派ソナタ（読譜の基本）</p> <p>第3回 ピアノ実技演習② 古典派ソナタ（指使いとアレンジ）</p> <p>第4回 ピアノ実技演習③ 古典派ソナタ（タッチ・音色）</p> <p>第5回 ピアノ実技演習④ 古典派ソナタ（リズム感・拍節感）</p> <p>第6回 ピアノ実技演習⑤ 基礎技術の研究（スケール・アルペジオ）</p> <p>第7回 ピアノ実技演習⑥ 古典派ソナタ（時代様式の研究）</p> <p>第8回 ピアノ実技演習⑦ 古典派ソナタ（作品解釈と演奏表現①）</p> <p>第9回 ピアノ実技演習⑧ 古典派ソナタ（作品解釈と演奏表現②）</p> <p>第10回 ピアノ実技演習⑨ 古典派ソナタ（作品解釈と演奏表現③）</p> <p>第11回 ピアノ実技演習⑩ 基礎技術の研究（ハノン）</p> <p>第12回 ピアノ実技演習⑪ 古典派ソナタ（演奏表現と仕上げ①）</p> <p>第13回 ピアノ実技演習⑫ 古典派ソナタ（演奏表現と仕上げ②）</p> <p>第14回 ピアノ実技演習⑬ 古典派ソナタ（演奏表現と仕上げ③）</p> <p>第15回 まとめ（実技試験・演奏会形式・公開）</p> <p>（以下省略）</p>

シラバス案 中畑「ピアノⅠB」

<p>ピアノⅠB 担当教員： 担当教員の所属： 開講学年：1年 開講学期：後期 単位数：2単位 開講形態：演習</p>
<p>【概要とねらい】 ピアノ演奏における基本的な演奏技術、表現手法を研究して、ピアノによる演奏表現の発展を目指す。とりわけ、基礎技術の向上とポリフォニー（多声音楽）の演奏表現に重点をおく。これらの成果は、暗譜による実技試験（発表会形式）を行って確認する。 バロックの音楽作品における様式感をとらえて適確な作品解釈をおこなうとともに、必要となる演奏技術ならびに表現技法について研究する。</p> <p>【授業計画】 第1回 オリエンテーション 後期の学習目標ならびに課題内容を確認する。各学生の進捗にもとづいた学習計画を検討・決定する。 第2回 ピアノ実技演習① 多声音楽（読譜の基本） 第3回 ピアノ実技演習② 多声音楽（指使いとアレンジ①） 第4回 ピアノ実技演習③ 多声音楽（指使いとアレンジ②） 第5回 ピアノ実技演習④ 多声音楽（タッチ・音色の工夫） 第6回 ピアノ実技演習⑤ 基礎技術の研究（ポリフォニー①） 第7回 ピアノ実技演習⑥ 多声音楽（時代様式の研究） 第8回 ピアノ実技演習⑦ 多声音楽（作品解釈と演奏表現①） 第9回 ピアノ実技演習⑧ 多声音楽（作品解釈と演奏表現②） 第10回 ピアノ実技演習⑨ 多声音楽（作品解釈と演奏表現③） 第11回 ピアノ実技演習⑩ 基礎技術の研究（ポリフォニー②） 第12回 ピアノ実技演習⑪ 多声音楽（演奏表現と仕上げ①） 第13回 ピアノ実技演習⑫ 多声音楽（演奏表現と仕上げ②） 第14回 ピアノ実技演習⑬ 多声音楽（演奏表現と仕上げ③） 第15回 まとめ（実技試験・演奏会形式・公開） （以下省略）</p>

これらのシラバスは「1. 楽譜を読む力をつける」「2. 音楽作品を適確に理解する力を育てる」「3. 音楽表現の技法を発展させる」「4. 演奏技術の向上をめざす」という育成の目標に基づいて作成されている。

13回にわたる実技演習における指導内容の重点は具体的に示されており、「各学生の進捗にもとづいた学習計画」により、これらの内容が取り扱われる。課題曲の研究のほかに基礎技術の習得として「スケール」「アルペジオ」「ハノン」「ポリフォニー」をとりいれている点が、特徴となっている。

	特徴
山形大学現行シラバス 伊達	<p>○15回にわたる授業計画の内容は、個別には示されていない。</p> <p>○『各人の進捗度によって』「1 正確な読譜力」「2 楽曲にふさわしい音づくり（表現力）」「3 ペダリング」「4 声部の独立性」「5 多声音楽の様式と把握」「6 個々人に適した楽曲も並行に取り上げ、楽曲の解釈・演奏能力の拡大」の育成を図るとしている。</p>
植木	<p>○13回にわたる実技演習では、「読譜（2回）」「分析・解釈（2回）」「技術の習得（2回）」「様式・形式の理解（2回）」「構成力・表現力（2回）」「確実な暗譜（2回）」のように、各回における重点が具体的に提示されている。</p> <p>○「初見視奏の実践」が導入されている。</p>
古賀	<p>○13回にわたる実技演習における指導内容の重点は具体的に示されていない。</p> <p>○「Ⅱ.正確な読譜力の育成」の展開として、「初見視奏のトレーニング」を導入している。</p> <p>○「Ⅳ.想像力・表現力の育成」の展開として、「楽曲解説を（文章として）まとめて提出させる」ようにしている。</p>
中畑	<p>○13回にわたる実技演習における指導内容の重点は具体的に示されている。</p> <p>○「各学生の進度にもとづいた学習計画」により、これらの内容が取りかわれるとしている。</p> <p>○課題曲の研究のほかに基礎技術の習得として「スケール」「アルペジオ」「ハノン」「ポリフォニー」をとりいれている。</p>

以上それぞれのシラバスの特徴を挙げたが、何れも1項であげた育成の目標が基本になっている事がわかる。しかし、前期15回 後期15回の授業の中で、全てを網羅することは難しい。履修生が1年生であることを踏まえ、学生が1年生の間に身につけるべき点を明らかにし、全員が理解し、実践できる授業計画を示したい。

1-3 シラバスのガイドライン

前項までの『育成の目標』のまとめ、各教員のシラバスの内容の検討をふまえ、この項では、実際にどのように15回の授業の中で『育成の目標』を反映させて行くかについて、具体的に考えてみたい。

まず、シラバスが、先に挙げた3本の柱＝『育成の目標』の具現化に相応しいものであるために、4人の議論をもとに以下のシラバス策定のガイドラインを作成した。

- ・読譜力・解釈力の育成のために、読譜に重点をおいた授業内容をシラバスに織り込む。読譜力育成とその評価のための独習課題＝「セメスター課題」を全員に課す。
- ・表現力・創造力の発展については、各自の授業の中で、音を出す前にその音楽解釈が必要になり、その第一歩が読譜であること、楽譜から読み取った音と音との間に最も表現すべきことがあることを伝える。
- ・演奏技術の向上のためには、基礎技術向上のため、ハノン教則本から課題を与える。
- ・演奏の完成度のチェックのため、リハーサルを実施する。
- ・授業計画は基本的に15回を記載するが、あまり細かい記載は授業運営上難しいため、大まかな方向を示すこととする。

次に、このシラバス策定のガイドラインに従って各項目を検討し、具体的な内容を示す。

1. 読譜力の概念についての全体授業の実施

一年次の学生のほとんどは、すでに10数年のピアノ教育を受け入学してきており、その既習経験は一様ではない。無論入学試験という同じハードルを潜り抜けて入学してきている訳だが、蓄積された力を入学試験の短い演奏だけで知ることは難しく、どうしても演奏の技術面に採点の重きが置かれてしまっていることは否めない。

しかしながら、大学におけるピアノ教育のスタートラインはどこであるかということを経験の中で改めて考えたとき、たとえ既習経験が異なっても、「読譜まずありき」、つまり一年次にまず楽譜を正確に読むことの重要性を伝えようというところにたどり着いた。そこで、「読譜力の育成」という統一指針の伝達手段の一つとして、授業の第2回目に「全体授業」を置き、担当する教員全員と一年次の学生全員が集まり、この授業のねらいである「読譜力の概念」の説明・効果による認識・実践について具体例をもって示す機会を設けた。このように、楽譜が音楽を導く上での全ての指針であるということ、一年次の段階で明確に伝えることにより、4年間の学習を進めて行く上での明確な方向性、すなわち「道しるべ」を個々の学生が見出せるようになると考えたからである。

2. 読譜力開発のための「セメスター課題」の導入と試験の実施

正確な読譜があって初めて音楽が理解でき、その先の「表現の世界」に到達できるということを、学生に明示することの必要性を教員の共通理解とし、その上で、「読譜力開発」のための具体的な授業内容を検討し、「セメスター課題」の導入を考案した。

これは読譜に重点をおいた授業実施のために新たに考案したもので、期末試験の3週間前に具体的な楽曲（セメスター課題＝独習視奏課題）を提示し、学生は独習により（レッスンを受けることなく）この課題を仕上げ、期末試験で演奏を行うものである。「セメ

ター課題」はあまり負担にならない程度の長さで、かつ演奏の指示が細かく書き記されている楽曲を教員が選択する。学生は楽譜に書かれた細かな指示を深く読み取り、その指示に従って、表現する上で必要となる技術を工夫しながら、自身の力で楽曲を仕上げる。その過程の中で、各学生がどこまで楽譜を読み取り音楽を表現出来るかが評価のポイントとなり、読譜力の達成度のチェックとして成績に加味する。

「セメスター課題」を含む「読譜力の開発」に重点をおいた授業の中で、個々の学生が読譜の基本を学びながら、自分自身の問題点を認識し、どう改め、どういう方向性をもって学習すべきかを見出すのが一年次の大きな目標と考える。そして、このしっかりとした「読譜力」がベースとなり、二年次、さらに上の学年へとつながっていくと考える。

3. ハノン教則本の導入

「演奏技術の向上」のため、基礎技術としてハノン教則本を教材として導入する。具体的には第1番～第10番、第39番（スケール全調）を取り上げ、期末試験において到達度をはかるための試験を行う。

4. リハーサルの実施

「演奏の完成度」をチェックするため、リハーサルを可能な限り行う。定期試験以外にも聴衆の前で演奏する機会をもつことは大切であり、これらにより各学生はその時点での到達度を確認することができる。さらに、お互いの演奏を聴き、気づいた点などを批評することにより、作品の解釈力や表現力の向上をも得られる。

5. 授業計画15回分の記載

授業計画については、シラバスにおいて15回分を記載し、指導内容の重点の大まかな方向を示す。

以上をふまえ、次項で2010年度ピアノ1 A / 1 Bシラバス案を示す。

1-4 新たなシラバス案

ピアノⅠA PianoⅠA 担当教員の所属：地域教育文化学部文化創造学科，音楽芸術コース 開講学年：1年 開講学期：前期 単位数：2単位 開講形態：演習	
【授業概要】	
・ テーマ ピアノ奏法の基本を認識・確認し、正確な読譜力の確立をめざす。	
・ ねらい	
Ⅰ 読譜力・解釈力の育成	
Ⅱ 表現力・創造力の発展	
Ⅲ 演奏技術の向上	
・ 目標 古典派のソナタを主な教材として、古典派の様式感および楽曲の形式を理解し、正確な読譜力と解釈力を身につける。	
【授業計画】	
・ 授業の方法 各人 30分程度の個人指導	
・ 日程	
第1回	ガイダンス（今後の授業の進め方・全体授業・「セメスター課題」の説明を行う）
第2回	全体授業（読譜の概念について学ぶ）
第3回	実技演習①
第4回	実技演習②
第5回	実技演習③
第6回	実技演習④
第7回	実技演習⑤
第8回	実技演習⑥
第9回	実技演習⑦
第10回	実技演習⑧
第11回	実技演習⑨
第12回	実技演習⑩
第13回	実技演習⑪
第14回	実技演習⑫
第15回	実技試験（学内公開）

◆実技演習①～⑫においては、各人の進度に合わせて授業を進める。前期試験課題曲である古典派のソナタを中心に、以下の点を学ぶ。

- ・ 正確な読譜力と分析・解釈力
- ・ 調性感、和声感、拍節感、フレーズ感
- ・ 正しい運指
- ・ 音質に見合った打鍵と脱力
- ・ 適切なペダルの使用
- ・ 古典派作品における様式感および楽曲の形式
- ・ 楽曲にふさわしい音づくり
- ・ 他の楽曲も取り上げ、楽曲の解釈・演奏能力の拡大を図る

- ・ 課題曲：①クレメンティ、ハイドン、モーツァルト：ソナタより任意の一曲（緩徐楽章を含む2つの楽章）を暗譜で演奏
- ②ハノン：No.1～No.10より当日指定されたものを暗譜で演奏
- ③読譜力開発のため「セメスター課題」を導入。期末試験3週間前に課題曲を掲示。3週間の独習による視奏演奏。
- ・ 試験終了後に個々に講評を行う。

【学習の方法】

授業は個人指導によって行われるが、授業時間内における他の学生のレッスンも聴講し、その指導内容を自分自身の学習に生かすのが望ましい。また、前回の授業での指導をもとに毎日の練習を行い、自発的に練習曲や他の楽曲に取り組み、さらに終了した楽曲をレパートリーとして常に練習に組み入れることが大切である。

【成績評価基準】

- ・ 期末実技試験の評価が、60点以上であること。
- ・ 実技試験（課題曲①②③）に平常点（受講および出席状況）を加味して総合的に評価
- なお、実技試験評価は複数教官（ピアノ実技担当教官）による。

【テキスト】

クレメンティ、ハイドン、モーツァルト：ピアノソナタの他、適宜授業内に指示する。

ピアノ I B

Piano I B

担当教員の所属：地域教育文化学部文化創造学科音楽芸術コース

開講学年：1年 開講学期：後期 単位数：2単位 開講形態：演習

【授業概要】

- ・ テーマ
ピアノ奏法の基本を認識・確認し、正確な読譜力の確立をめざす。
- ・ ねらい
 - I 読譜力・解釈力の育成
 - II 表現力・創造力の発展
 - III 演奏技術の向上
- ・ 目標
バッハ「平均律クラヴィーア曲集」を教材として、声部の独立と声部間のバランス感を身につける。バロックにおける様式感および楽曲の形式を知る。

【授業計画】

・ 授業の方法

各人 30 分程度の個人指導

・ 日程

第 1 回 ガイダンス（今後の授業の進め方・「セメスター課題」の説明を行う）

第 2 回 実技演習①

第 3 回 実技演習②

第 4 回 実技演習③

第 5 回 実技演習④

第 6 回 実技演習⑤

第 7 回 実技演習⑥

第 8 回 実技演習⑦

第 9 回 実技演習⑧

第 10 回 実技演習⑨

第 11 回 実技演習⑩

第 12 回 実技演習⑪

第 13 回 実技演習⑫

第 14 回 実技演習⑬

◆実技演習①～⑬においては、各人の進度に合わせて授業を進める。後期試験課題曲であるバッハ:平均律クラヴィーア曲集を中心に、以下の点を学ぶ。

- ・ 正確な読譜力と分析・解釈力
- ・ 調性感、和声感、拍節感、フレーズ感
- ・ 正しい運指
- ・ 音質に見合った打鍵と脱力
- ・ 適切なペダルの使用
- ・ バロックの作品における様式感および楽曲の形式
- ・ 楽曲にふさわしい音づくり
- ・ 他の楽曲も取り上げ、楽曲の解釈・演奏能力の拡大を図る

第 15 回 実技試験（学内公開）

- ・ 課題曲：①バッハ:平均律クラヴィーア曲集 I II より任意の一曲（プレリュードとフーガ）を暗譜で演奏
 - ②ハノン:スケール全調より当日指定された調とその平行調を暗譜で演奏
 - ③読譜力開発のため「セメスター課題」を導入。期末試験 3 週間前に課題曲を掲示。3 週間の独習による視奏演奏。
- ・ 試験終了後に個々に講評を行う。

【学習の方法】

授業は個人指導によって行われるが、授業時間内における他の学生のレッスンも聴講し、その指導内容を自分自身の学習に生かすのが望ましい。また、前回の授業での指導をもとに毎日の練習を行い、自発的に練習曲や他の楽曲に取り組み、さらに終了した楽曲をレパートリーとして常に練習に組み入れることが大切である。

【成績評価基準】

- ・ 期末実技試験の評価が、60 点以上であること。
- ・ 実技試験（課題曲①②③）に平常点（受講および出席状況）を加味して総合的に評価
なお、実技試験評価は複数教官（ピアノ実技担当教官）による。

【テキスト】

バッハ:平均律クラヴィーア曲集の他、適宜授業内に指示する。

結 び

これまで、より望ましい一年次の授業計画のあり方を考えてきたが、読譜の能力開発が最も重要であり、早急に授業に取り入れるべきであるという結論を得た。

音楽を学ぶ過程で、よく言語の習得が引き合いに出されるが、アルファベットやひらがなが読めても、言葉や文章の意味を理解できるとは限らないように、音符の名前や長さが分かっただけでは、音と音の関係によってもたらされる音楽的意味、内容、色調、方向性などを理解したことにならないのは明白である。つまり、音楽における基礎教育の一本目の柱としての読譜教育は、二本目の柱である表現力を身につける教育の前段階であり、この二本の柱が結びついて初めて、音楽作品としての意味内容を持った演奏に繋がって行くものであろう。

今回の4名の教員による議論を踏まえて新たに作成されたシラバスは、22年度入学のピアノA、B履修者を対象に実施したい。その成果について注意深く観察・検証を重ねて、順次学年に対してより相応しい育成の目標・授業計画を立てていく予定である。

Summary

Hanako DATE, Yuriko UEKI, Makoto NAKAHATA, Machiko KOGA :
Syllabus Making for Keyboard Instrument Instruction
— Developing Music Literacy —

This paper illustrates the process of syllabus making for Keyboard Instrument Instruction in the Faculty of Education at Yamagata University in order to provide coherent instruction for freshmen by multiple instructors by emphasizing the importance of developing music literacy.

(Section of Keyboard Instrument, Faculty of Education, Art and Science)